福岡市埋蔵文化財調査報告書第1089集

博多138

博多遺跡群第184次調査報告

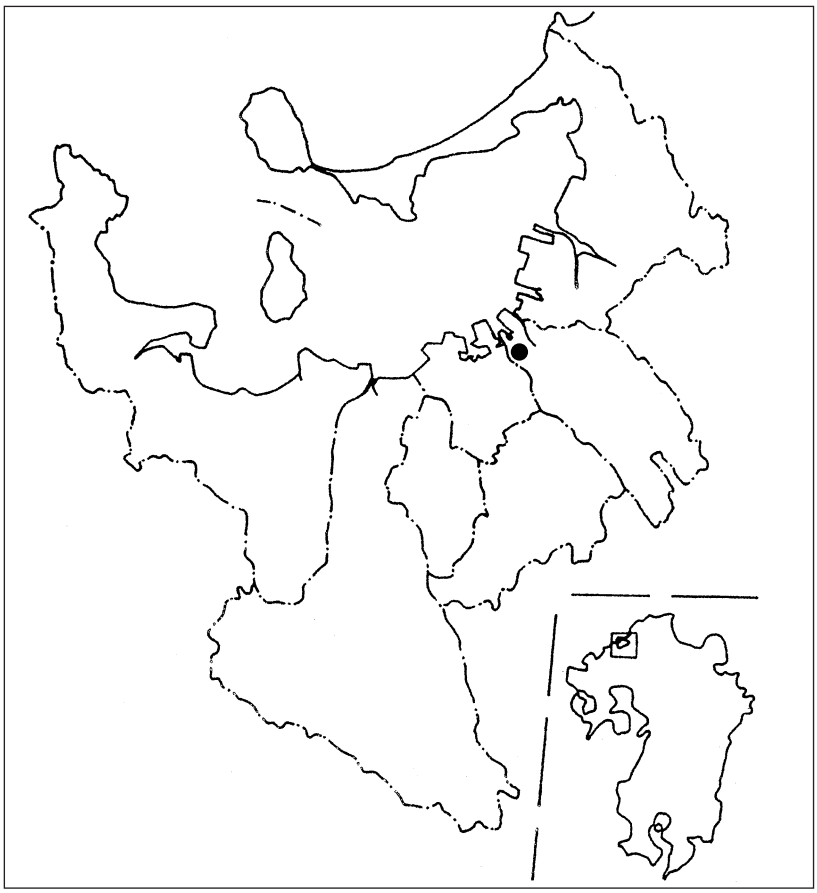
２０１０

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1089集

博多138

博多遺跡群第184次調査報告



遺跡略号　HKT-184
調査番号　0820

２０１０

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面する港湾都市福岡は、太古の昔から大陸との交流の窓口として栄え、それを示す多数の埋蔵文化財を残してきました。中でも大博通りを中心にビル群が建ち並ぶ一帯は、博多遺跡群と呼ばれ、市内有数の遺跡の一つに数えられ、調査を開始して30年、回数も200回近くに及ぼうとしています。

本書は博多のメインストリート大博通りに面した西側、冷泉町にて実施した第184次調査の成果を収めるものです。本調査では近世の溝、中世の井戸・土坑などが発見されています。

発掘調査にご協力をいただいた大塚一男様に、感謝の意を表するとともに、本書を通じて調査成果がより多くの方々に共有され、活用されることを願ってやみません。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会

教育長　山 田　　裕 嗣

例　言

1．本書は共同住宅建設に伴い、福岡市博多区冷泉町172－2、173、174－1において実施した博多遺跡群第184次調査の報告である。

2．検出遺構はピットとそれ以外のものとに分け、それぞれ通し番号とし、以下の略号を付した。

溝　SD　　井戸　SE　　土坑　SK　　ピット　SP

3．遺構の実測は木下博文が行った。

4．遺構・遺物の写真撮影は木下博文が行った。

5．遺物の実測、採拓、製図は木下博文が行った。

6．本書で用いる方位は磁北であり、真北から６°21′西偏する。

7．本文、挿図、写真図版における遺物番号は通し番号とし、それぞれ対応する。

8．本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。

9．本書の執筆・編集は木下博文が行った。

調査番号　０８２０	**遺跡略号**　HKT－184	**分布地図番号**　48　天神　０１２１
所 在 地　博多区冷泉町172－２、173、174－１		**事前審査番号**　20－２－16
開発面積　233.15㎡	**調査対象面積**　163㎡	**調査面積**　131.8㎡
調査期間　2008.７.２～８.７		

本文目次

第１章　はじめに …… 1
　１　調査に至る経緯
　２　調査体制
第２章　遺跡および調査地点の位置と環境 …… 1
第３章　調査の記録 …… 4
　１　調査の概要 …… 4
　２　遺構と遺物 …… 5
　　第１面 …… 5
　　第２面 …… 7
　　第３面 …… 9
　　包含層出土遺物 …… 10
第４章　まとめ …… 11

挿図目次

図１　遺跡の位置（S＝1/25000） …… 2
図２　調査地点の位置（S＝1/8000） …… 2
図３　調査区の位置（S＝1/1000） …… 3
図４　調査区の位置（S＝1/200） …… 3
図５　調査区南壁・西壁土層断面図（S＝1/40） …… 4
図６　第1面平面図（S＝1/100） …… 5
図７　SD01土層断面および出土遺物実測図（S＝1/40、1/3、1/2） …… 6
図８　第２面平面図（S＝1/100） …… 7
図９　SE02および出土遺物実測図（S＝1/40、1/3） …… 8
図10　SK03および出土遺物実測図（S＝1/40、1/3） …… 9
図11　第３面平面図（S＝1/100） …… 9
図12　SK04および出土遺物実測図（S＝1/40、1/3） …… 10
図13　銅銭拓影（S＝1/1） …… 10
図14　近世瓦刻書人名拓影（S＝1/1） …… 10

図版目次

図版１　上　第1面全景（南東から）　下　SD01土層断面（南東から） …… 12
図版２　上　第2面全景（北西から）　下　SE02（南東から） …… 13
図版３　上　SE02最下部（南東から）　下　調査区西壁・SE02土層断面（北東から） …… 14
図版４　上　SK03（北東から）　下　SK03土層断面（北東から） …… 15
図版５　上　第３面全景（東から）　下　SK04（北から） …… 16
図版６　上　砂丘面全景（南東から）　下　調査区南壁土層断面（北西から） …… 17
図版７　出土遺物１ …… 18
図版８　出土遺物２ …… 19

第１章　はじめに

１　調査に至る経緯

2008（平成20）年４月４日、大塚一男氏より福岡市教育委員会宛に福岡市博多区冷泉町172－2、173、174－1における土地売買に伴う埋蔵文化財の有無について照会があった（事前審査番号20－2－16）。申請地は博多遺跡群の範囲内にあることから、協議の上2008（平成20）年４月24日に試掘調査を行った。その結果現地表面下2.0mにて遺構面を確認した。現状保存を前提に協議を行ったが、今回は設計変更不可能とのことから、発掘調査を実施することとなった。

本調査は2008（平成20）年７月２日に着手、８月７日に終了した。

２　調査体制（当時）

申 請 者　大塚一男
調査主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第２課
調査総括　埋蔵文化財第２課長　田中寿夫
　　同調査第１係長　杉山富雄
調査庶務　文化財管理課管理係　古賀とも子
事前審査担当　埋蔵文化財第１課事前審査係　藏富士寛
調査担当　埋蔵文化財第２課調査第２係　木下博文
調査作業　今村良輔　大庭義久　近藤澄江　日高芳子　藤野幸雄　村田敬子　渡部律子
整理作業　宮本典子

調査にあたり、調査区外柵・ユニットハウス・仮設トイレ・電気・水道・表土鋤取り・排土搬出の現物提供を受けた。申請者の大塚氏ならびに江藤土地家屋調査士事務所、周辺住民の方々の多大な御協力により、調査を実施することができた。記して謝意を表する。

第２章　遺跡および調査地点の位置と環境

博多遺跡群は博多湾に面し、那珂川と御笠川に挟まれた３列の砂丘上に展開する弥生～近世に至る複合遺跡である。海寄りを息浜（おきのはま）、内陸の２列を博多浜と呼称し、現在の呉服町交差点付近で狭い陸橋状の砂丘でつながっていた。

今回の調査地点は博多浜の中央、祇園町交差点の北西、龍宮寺の南隣、大博通りを挟んで東長寺と相対する場所に位置する。付近一帯は南に４次・24次、北に23次・105次調査地点があり、中世期の遺構のほか弥生時代の甕棺墓も検出されている。

特に４次調査では、ほぼ真北に直交する２本と戦国時代末の太閤町割に沿った１本の溝を検出している。また井戸も15基と多く、大きな円形の掘形に２段組の木桶を井戸側とするものがほとんどである。年代も近世まである。

24次・36次調査では弥生時代中期の甕棺墓が検出され、同方向の配列を示し、「列状配置墓」・「二列埋葬墓」として把握されている。

今回の調査地点でもこれらに関連する遺構の展開が見込まれる。

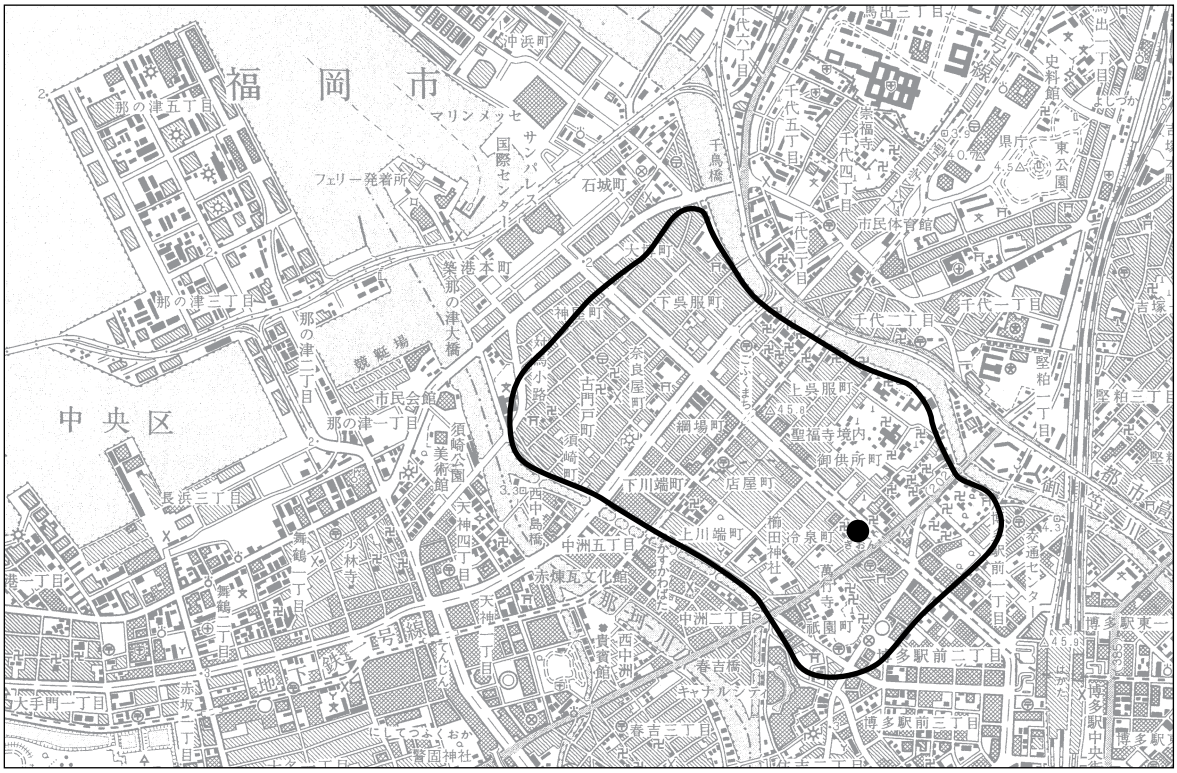


図１　遺跡の位置（Ｓ＝1/25000）

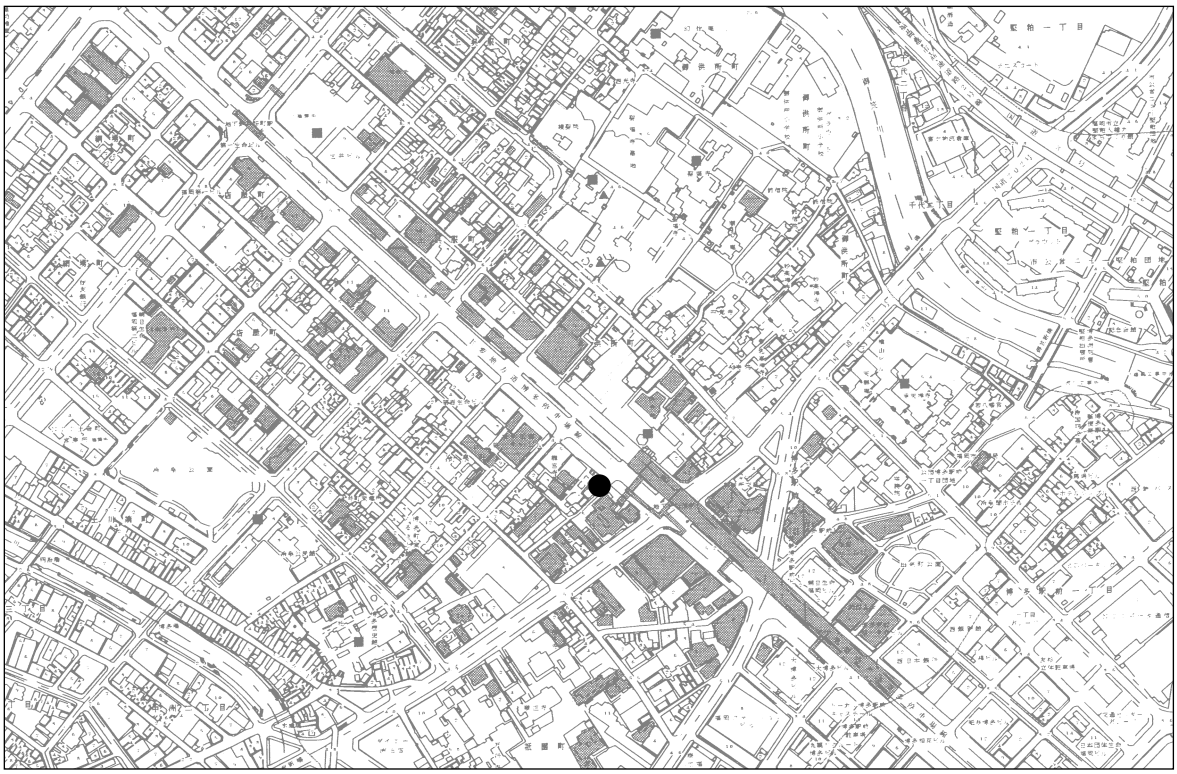


図２　調査地点の位置（Ｓ＝1/8000）

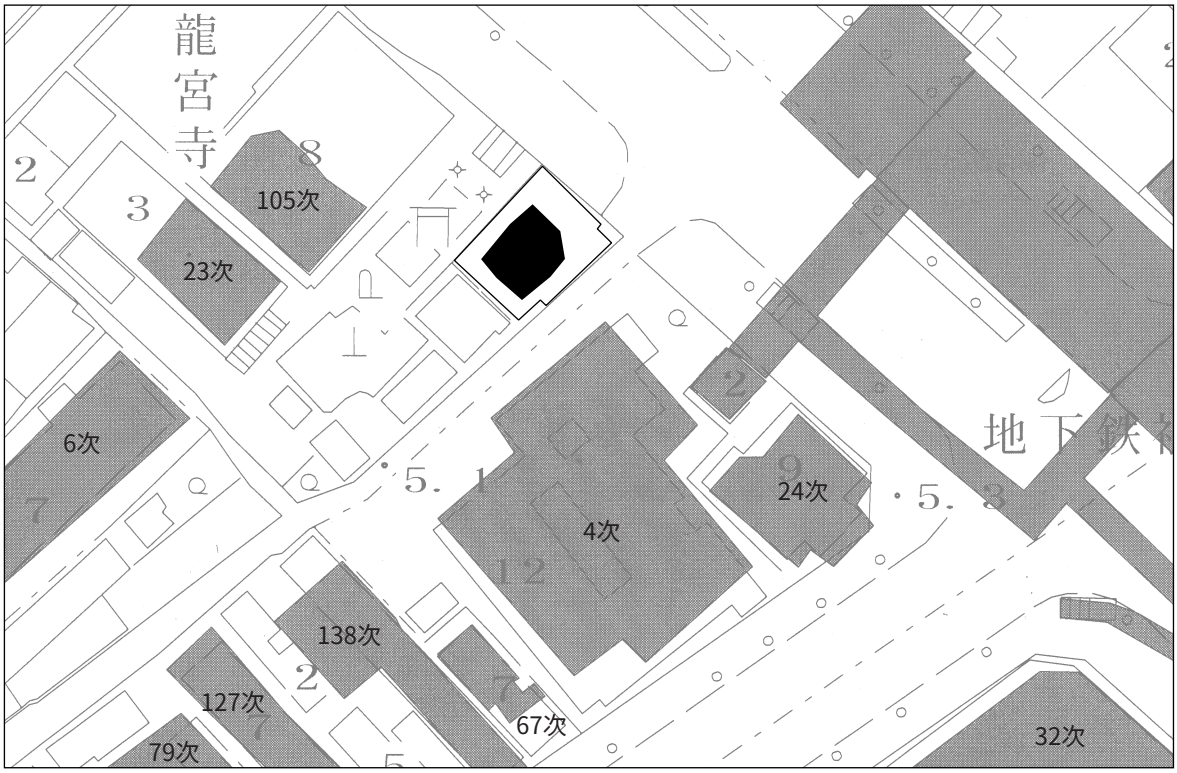


図３　調査区の位置（Ｓ＝1/1000）

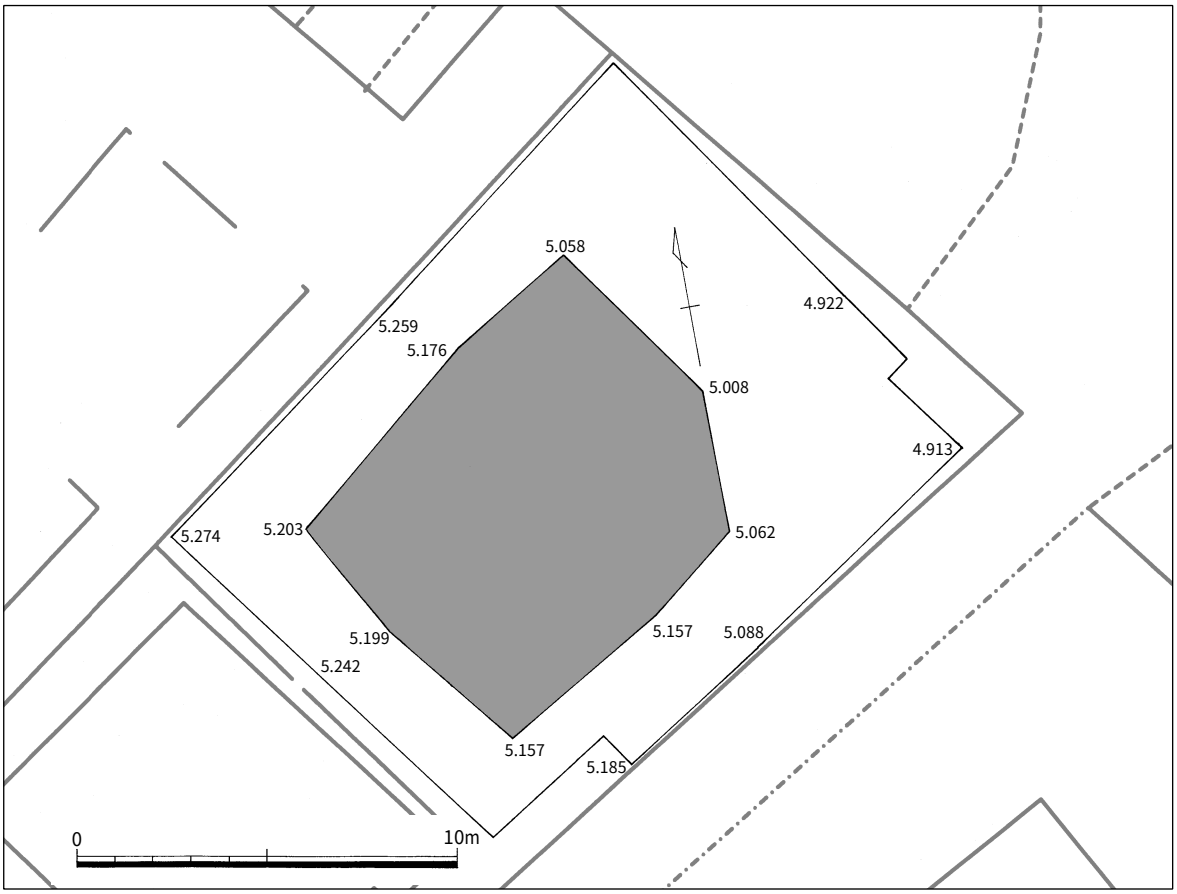


図４　調査区の位置（Ｓ＝1/200）　数字は、標高

第３章　調査の記録

１　調査の概要

申請地の標高は西隅で5.27m、東隅で4.9mと西から東に向かって緩やかに低くなっている。事前の試掘調査により、現地表下1.6mで近世遺物・炭が混じる土層、2.0mで遺構面が確認された。それに基づき事前に現物提供により、近世遺物包含層上面まで表土鋤取りが行われた上で、2008年7月2日より人力による掘削に着手した。なお今回は矢板を打たず、法面をつけての掘削である。したがって調査区の上場面積は131.8㎡であるが、下場面積は23㎡である。

約0.2mずつ掘り下げ、遺構確認を繰り返し、地山である灰白色細砂層までの間に計3面の遺構面を検出した。第1面は現地表下2.1m・標高3.0m付近で近世の大溝を検出した。第2面はさらに0.2m下、標高2.85で井戸1・土坑1・ピットを検出した。第3面はさらに0.3m下、標高2.55mで土坑１・ピットを検出した。さらに0.2m下で地山の砂丘面に達したが上面で遺構は確認されなかった。調査区の下場面積が非常に狭い上、上層から掘り込まれる溝・井戸の大きく深い遺構に占められており、削られたことによると見られる。

出土遺物は中コンテナ38箱分出土しているが、その9割以上が近世以降の陶磁器・瓦で、第1面より上の包含層出土である。瓦の中には人名を刻書するものが16点含まれていた。銅製品として銭貨（寛永通宝）1、煙管がある。残りの1割に満たない遺物には、弥生土器・須恵器・土師器・中世陶磁器が含まれる。

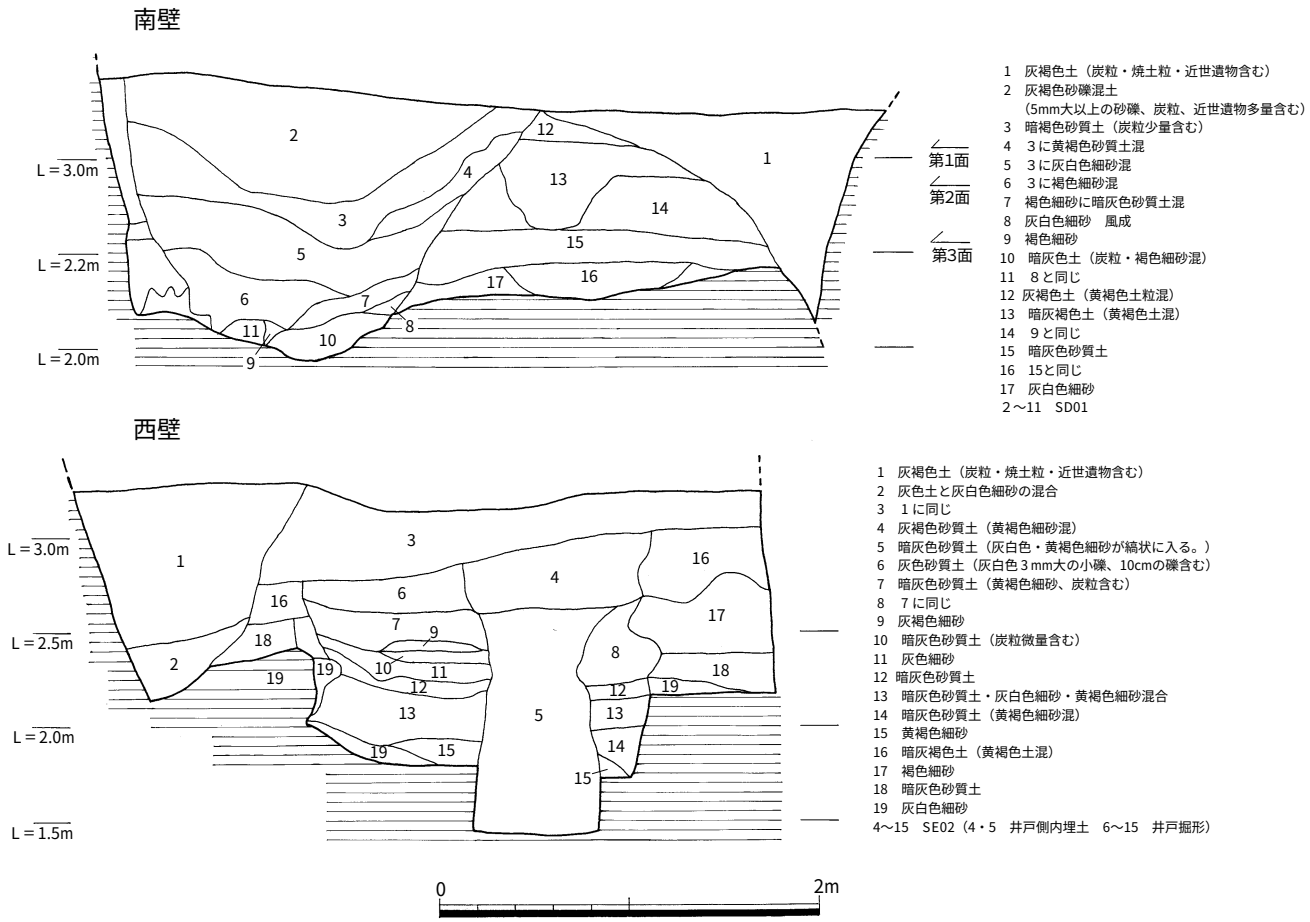


図５　調査区南壁・西壁土層断面図（Ｓ＝1/40）

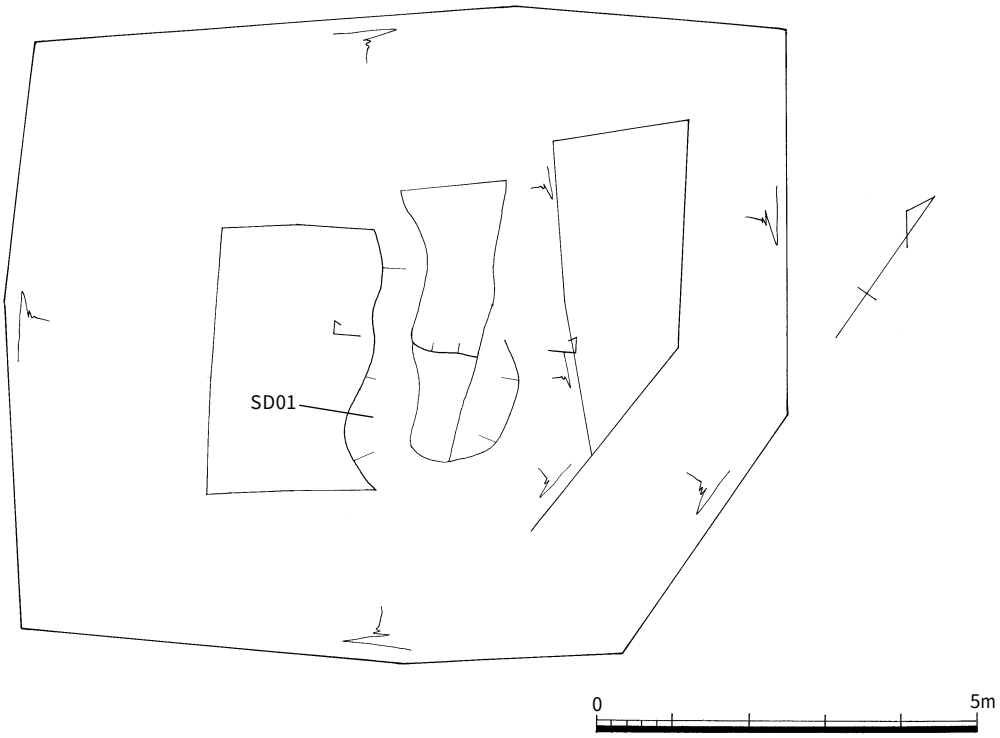


図６　第１面平面図（Ｓ＝1/100）

２　遺構と遺物

第１面

溝

SD01（図６・７、図版１）

調査区東端で検出した。走向は南北で長さ3.5m分を確認した。幅は調査区法面・ベルトコンベア設置のための引きにより東側が不明確ではあるが、調査区南壁土層断面から2.2mと見られる。深さは1.1mで、砂丘面に達している。太閤町割によるとされる現在の大博通りにほぼ並行し、溝より上層の遺物包含層から寛永通宝が出土していることから、16世紀末に開削され、17世紀前半には埋没し、機能を失っていたと見られる。出土遺物は近世の陶磁器、瓦、溝掘削により破壊された12世紀代の遺構のものと見られる土師器皿、青磁・白磁が出土している。

出土遺物（図７）

１は焼塩壺である。淡橙色を呈し、底部に布目痕が残る。２は施釉陶器の椀である。高台外面の半ばまで、褐色の釉薬がかかる。3は焼締陶器の鉢である。外面が淡赤褐色、内面が黒褐色を呈し、内面は釉がかかっているように見える。胎土は1mm大の白色砂粒・赤粒を多量含む。調整は底部外面に回転糸切り痕が残る。４～８は土師器の皿である。色調は4が淡褐、５・６・８が浅黄橙、７が淡橙色である。底部調整は回転糸切りで、７のみ板目圧痕がある。９は施釉陶器の小鉢である。底部外面以外に暗赤褐色の施釉を行い、内面に7本一組の櫛描を反時計回りに11回行っている。10は白磁椀の高台である。内面のみ施釉する。11は陶器の壺である。色調は内外面が褐色、断面が外面側赤褐色、内面側灰色を呈す。12は銅製の煙管である。13は石球である。

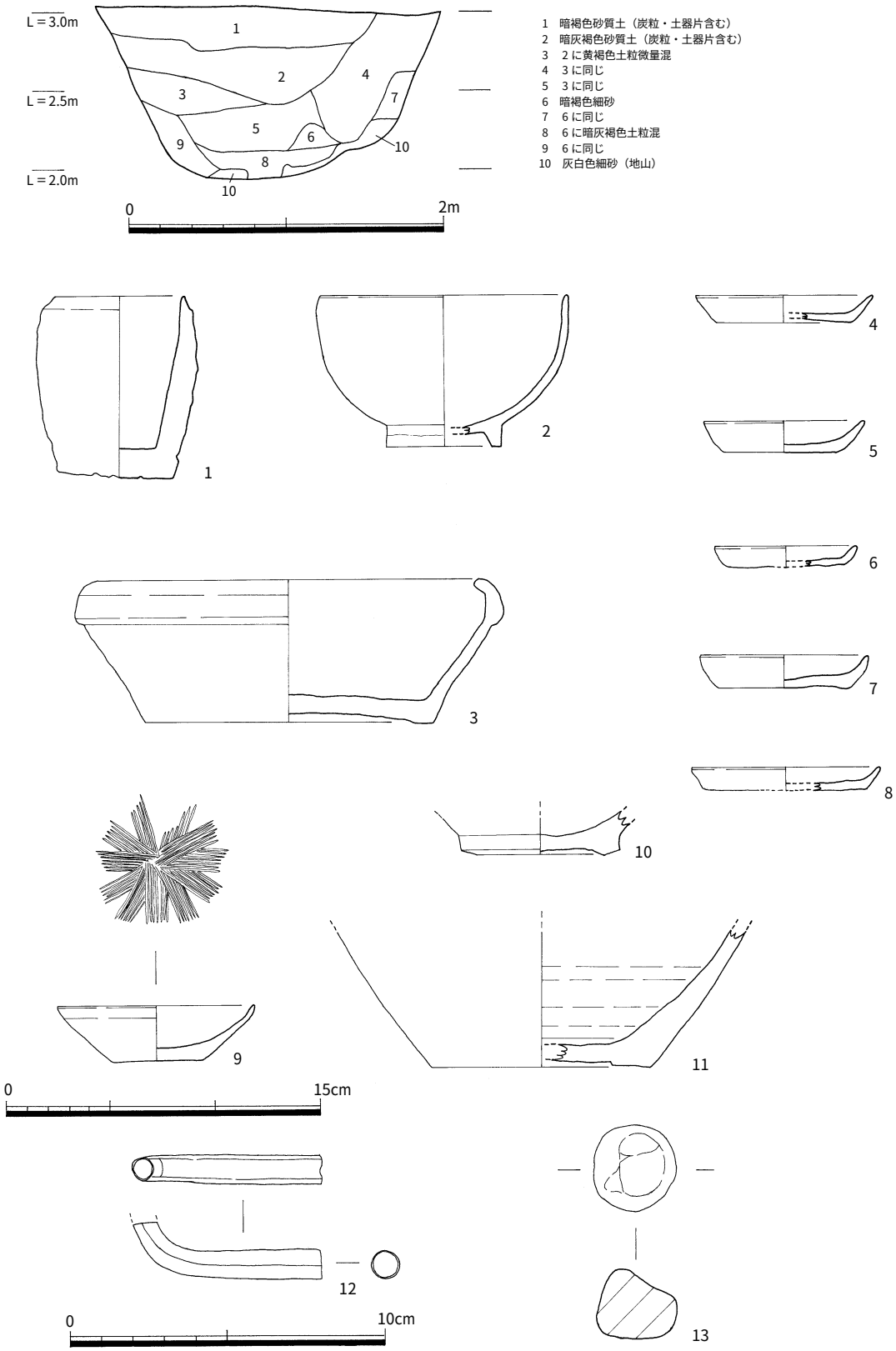


図７　SD01土層断面・出土遺物実測図（S＝1/40、1/3、1/2）

第２面

井戸

SE02（図９、図版２・３）

調査区西端で検出した。調査区設定範囲および法面によって、西半は調査区外である。掘形は径2.35m、深さ1.1mの擂鉢状で、中央に径0.7m、深さ0.9～1.02mの井筒痕跡を持つ。井筒には木の板を用いていたが、腐朽した薄皮状のものがわずかに残っていたのみである。出土遺物は回転糸切り底の土師器皿、白磁、同安窯系青磁が出土しており、12世紀代とみられる。

出土遺物（図９）

14～18、22は土師器で、14・15は小皿、16・17・21は皿、18は高台付椀である。色調はいずれも浅黄橙、底部調整は17・18のみなでで、それ以外は回転糸切り痕、板目圧痕なしである。

19は焼締陶器の鉢である。復元口径26.0cm、残存高5.0cm、色調は赤褐色を呈し、胎土は1～2mm大の白色砂粒を少量含む。

20は施釉陶器の壺である。復元口径11.2cm、残存高2.4cm、灰色の素地に灰緑色の釉がかかっている。

21は焼締陶器の壺である。復元口径11.6cm、残存高1.8cm、色調は外面が褐色、断面が灰色を呈す。出土位置は14～16が井戸側内最下層、17・18が上層、20・22が掘形である。

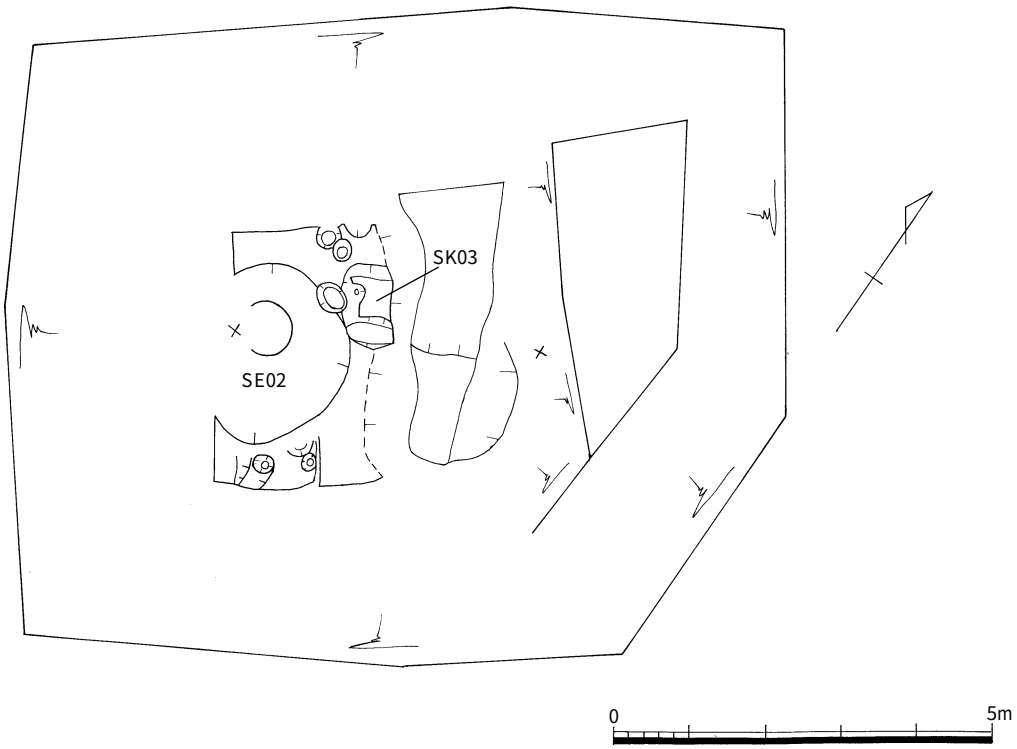


図８　第２面平面図（S＝1/100）

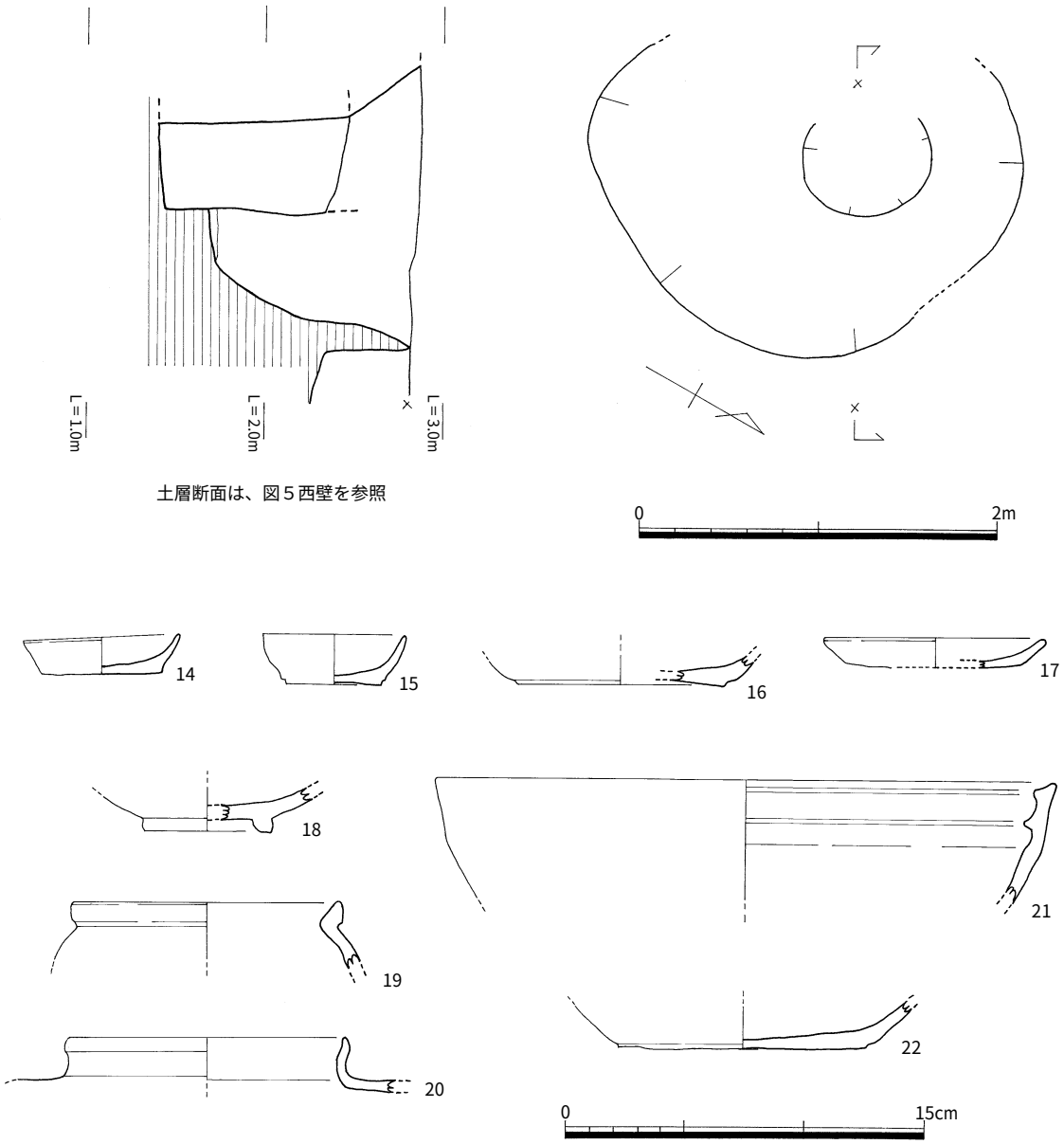


図９　SE02、調査区西壁土層断面、出土遺物実測図（S＝1/40、1/3）

土坑

SK03（図10、図版４）

調査区中央部で検出した。南北幅1.1m、東西残存長0.65mの長方形、深さ0.3～0.4mで、SD01によって東半分を削られている。出土遺物は糸切り底の土師器皿、白磁・青磁・陶器が出土しており、12世紀代とみられる。

出土遺物（図10）

23は施釉陶器の鉢か。復元口径18.8cm、残存高3.3cm、内外面に褐色の釉がかかる。色調は内外面褐色、断面赤褐色を呈す。

24は陶器の壺である。復元口径11.6cm、残存高3.5cm、色調は灰色を呈す。

25は青磁椀である。復元口径15.4cm、残存高3.6cm、外面に櫛描文があり、同安窯系である。

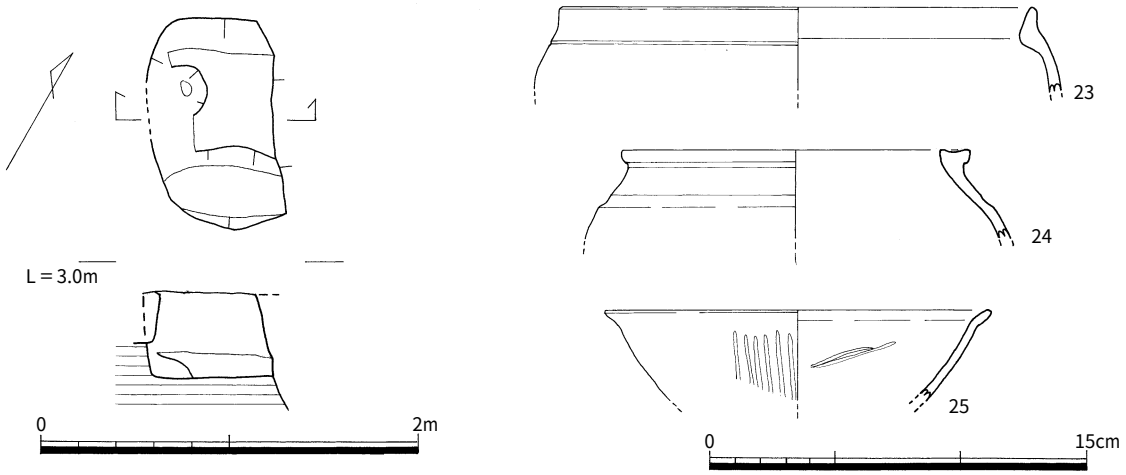


図10　SK03および出土遺物実測図（S＝1/40、1/3）

第３面

土坑

SK04（図12、図版５）

調査区南壁に接して検出した。褐色系砂質土の盤に黒ずんだ砂質土の範囲が見られたことから、遺構と認定して掘り下げた。東西径1.0m、深さ0.19mである。その後調査区南壁土層断面精査時には、明瞭な遺構の立ち上がりが確認できなかったが、土坑として報告しておく。

出土遺物（図12）

26は土師器の高杯である。復元底径10.0cm、残存高6.3m、色調は浅黄橙色を呈す。脚部に径1.0cmの円形透かし孔があけられている。調整は脚部裾に刷毛目がうっすらと見える。

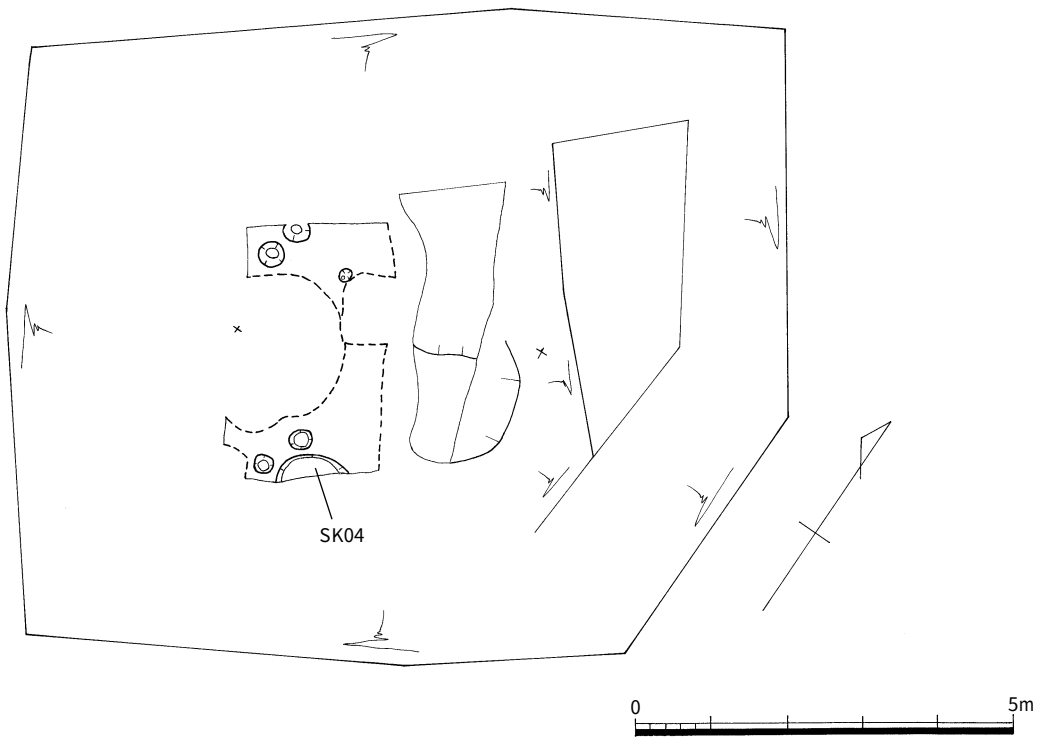


図11　第３面平面図（S＝1/100）

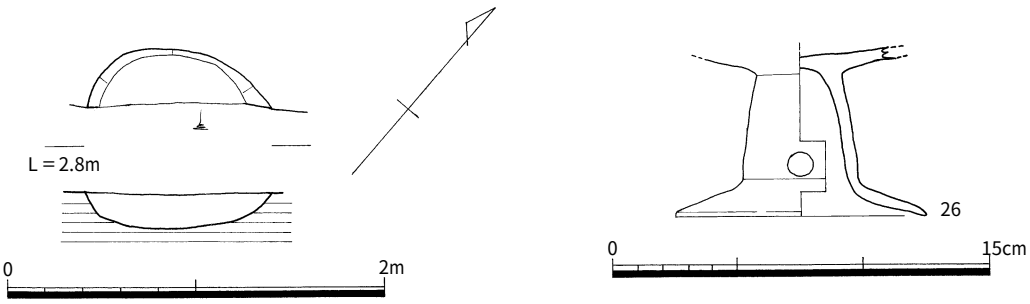


図12　SK04および出土遺物実測図（S＝1/40、1/3）

包含層出土遺物（図13、14）

27は、銅銭の寛永通宝である。第１面のSD01よりやや上層から出土した。包含層・遺構の時期を押さえる手がかりとなる。

包含層には大量の近世瓦が含まれており、その中には人名を刻書するものがあった。計16点確認している。その中で判読ができたものを選んで、図14に掲載する。

28は久左衛門、29は三郎衛門、30は右衛門、31は四郎左衛門、32は九左衛門、33は新九郎、34は勘兵衛、35は甚左衛門、36は仁左衛門、37は七衛門と判読した。

図13　銅銭拓影（S＝1/1）

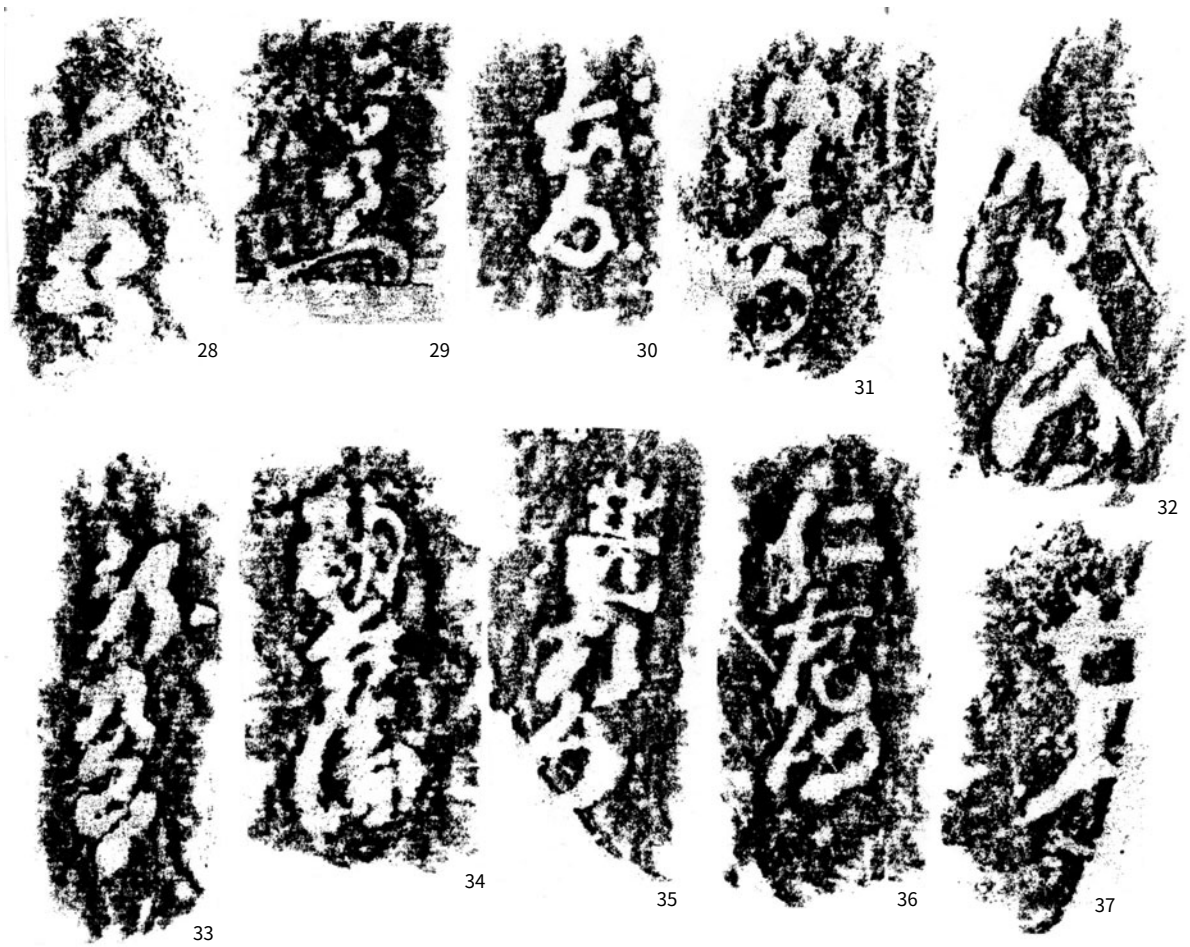


図14　近世瓦刻書人名拓影（S＝1/1）

第４章　まとめ

以上の調査成果について、最後に簡単ながらまとめておきたい。

今回の調査では計3面の遺構面を検出した。第1面は近世初頭に位置づけられ、南北の大溝1条を検出した。その走向は現在の大博通りにほぼ並行している。大博通りに伴う町割は、豊臣秀吉によって施行されたことから上限は16世紀末、下限は溝よりやや上層の包含層から寛永通宝が出土していることから、その初鋳年の寛永13年（1636)、17世紀前半と位置づけられる。南隣に位置する第4次調査地点の4号溝と関連をもつ可能性が考えられるが、どのような性格を持つのか空間・機能的位置づけについては、現状では不明と言わざるを得ない。

第２面は中世前期に位置づけられ、井戸1基と土坑1基、ピットからなる。龍泉窯系鎬蓮弁文青磁椀が見られず、同安窯系青磁椀が見られることから、12世紀代におさまるものと見られる。

第３面はSK04に見られるように、古墳～古代の面か。第3面から地山の砂丘面までの掘り下げ時に弥生土器の破片が若干数出土している。後の時代の遺構覆土に混入している須恵器片もあり、周辺地における調査成果からも、古代以前の遺構が展開していたはずであるが、井戸、溝といった深い遺構があり、破壊が進んだものと思われる。従って今回の調査では古代以前の遺構は、決して明確とはいえない。

第１面全景（南東から）

SD01土層断面（南東から）

図版２

第２面全景（北西から）

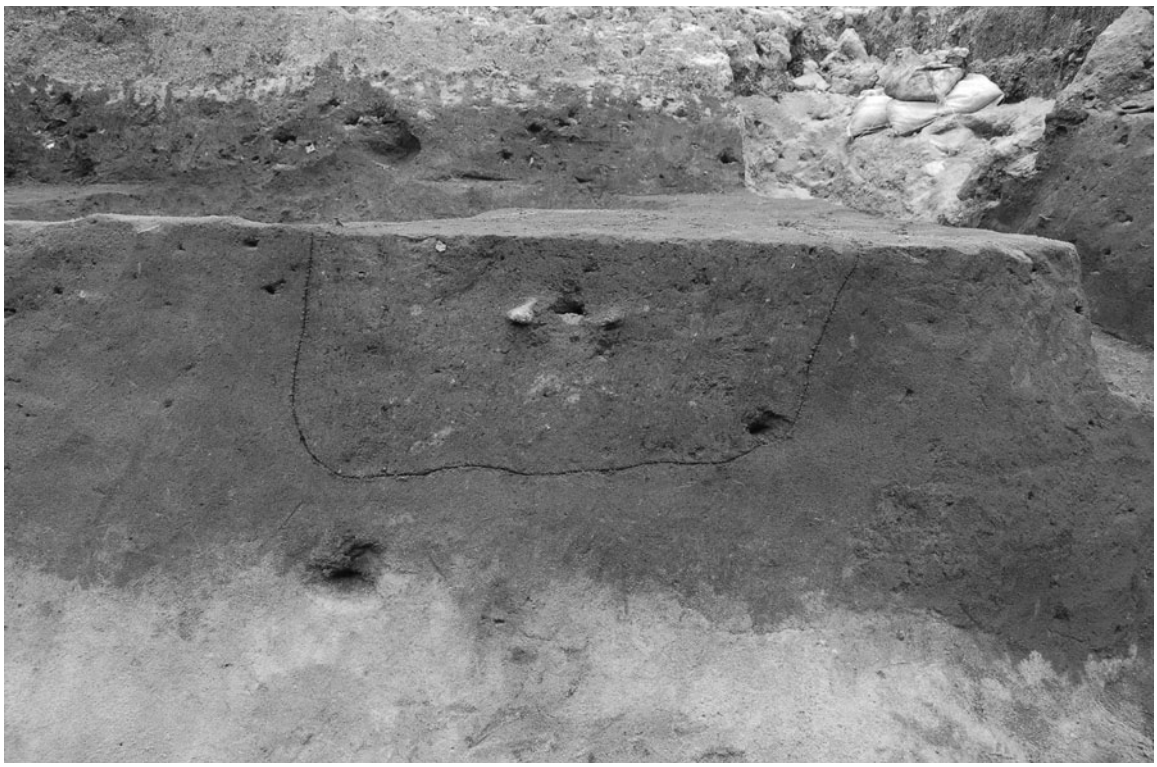
SE02（南東から）

SE02最下部（南東から）

調査区西壁・SE02土層断面（北東から）

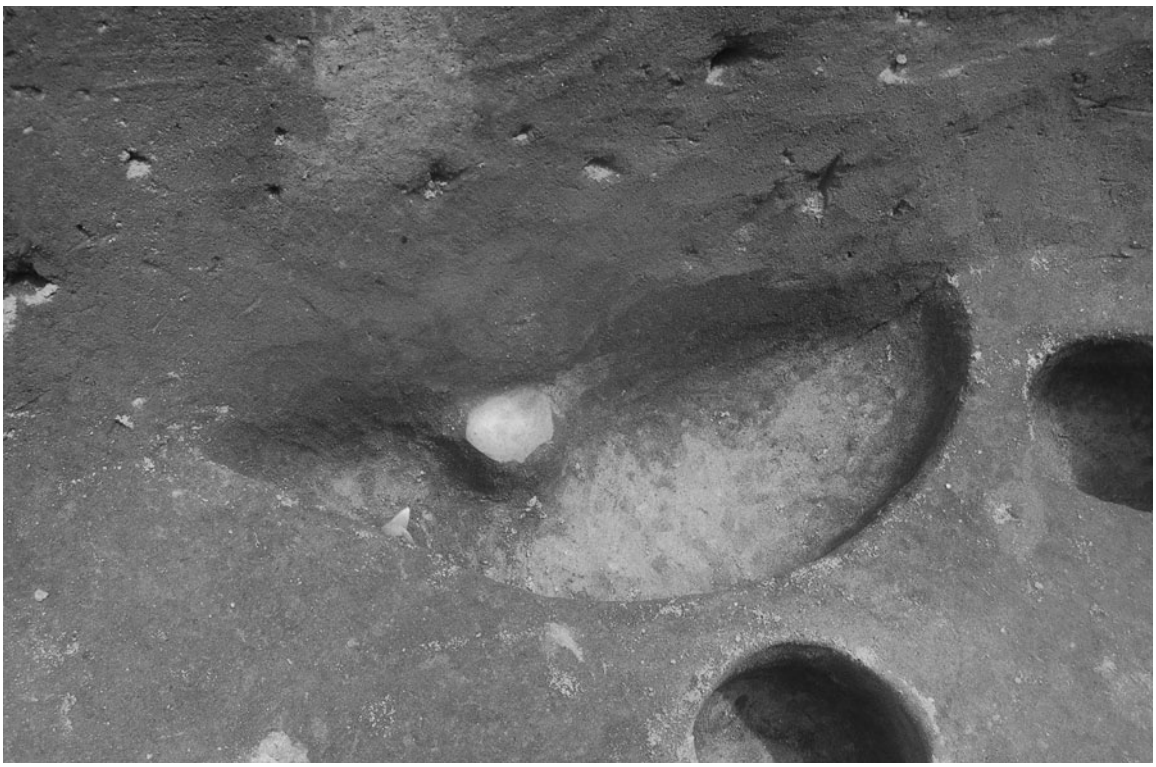
図版４

SK03（北東から）



SK03土層断面（北東から）

第３面全景（東から）

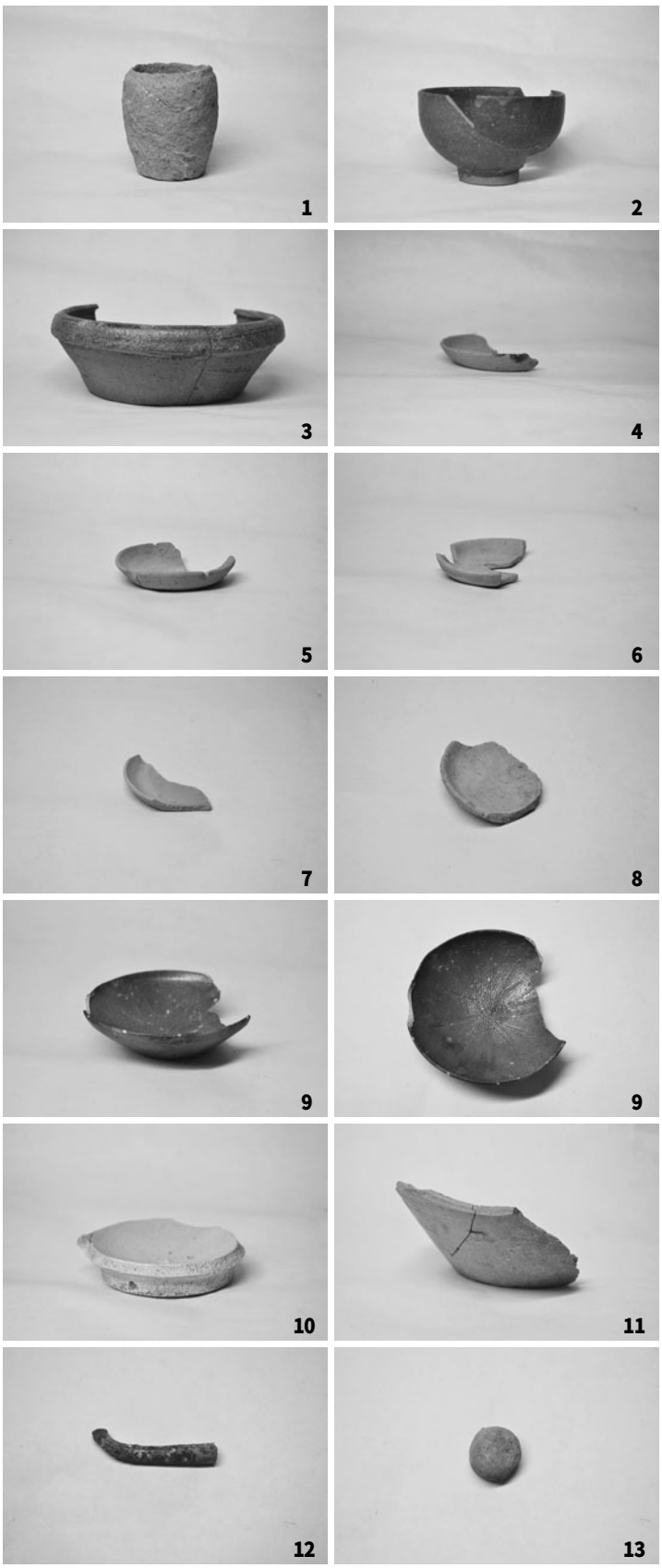


SK04（北から）

図版６

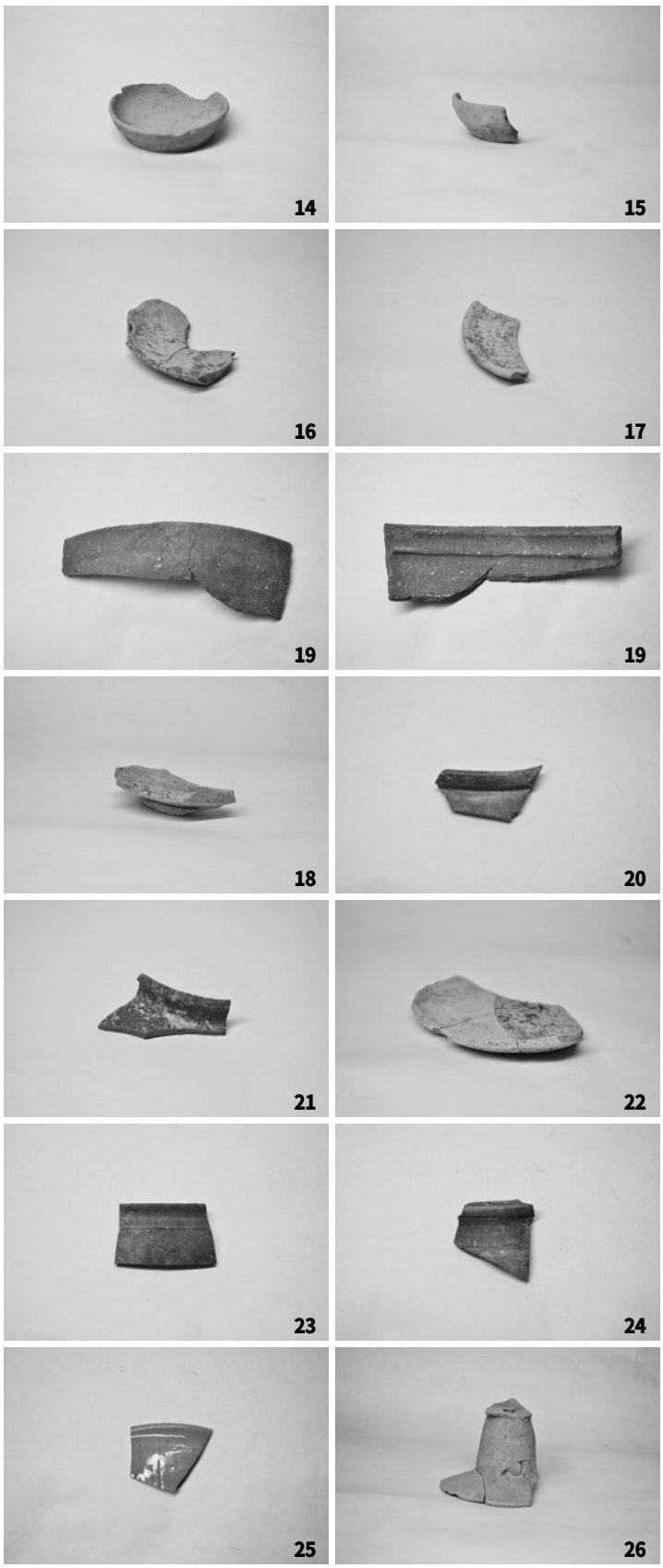
砂丘面全景（南東から）

調査区南壁土層断面（北西から）



出土遺物１

図版８



出土遺物２

報告書抄録

書名ふりがな	はかたひゃくさんじゅうはち		
書名	博多138		
副書名	博多遺跡群第184次調査報告		
巻次	138		
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	第1089集		
編著者名	木下博文		
編集機関	福岡市教育委員会		
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神1－8－1　ＴＥＬ092(711)4667		
発行年月日	2010年３月23日		
所収遺跡名ふりがな	はかたいせきぐん		
所収遺跡名	博多遺跡群		
所在地ふりがな	ふくおかしはかたくれいぜんまち		
所在地	福岡市博多区冷泉町		
市町村コード	40131	遺跡番号	0121
北緯	33°35′40″	東経	130°24′48″
調査期間	2008.7.2～8.7	調査面積	131.8㎡
調査原因	共同住宅建設		
種別	集落		
主な時代	中世／近世		
主な遺構	溝／井戸／土坑／柱穴		
主な遺物	土師器、中国産陶磁器、瓦、銅製品		

博多138

博多遺跡群第184次調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1089集

2010（平成22）年3月23日

発行　福岡市教育委員会
〒810-8621
福岡市中央区天神１－８－１

印刷　有限会社大進印刷
〒810-0016
福岡市中央区平和５－21－６